〔下學集下草木〕女郎花（ヲミナメシ）

〔塵袋三〕一女郎花ト云フハヲミナヘシト云フモノ歟他花歟

源順ガ俗呼爲女郎ト云ヘルハ、タシカノ說ナキ心歟、菊女郎花ト云コトハ大概分明ナル歟、靈鬼志曰、何文漢人也、有一女子容貌美、率死葬、明日見其塚、盡成菊花、故名菊花女、亦名女郎花云ヘリ、順ガ花色如蒸粟ト云ヘル、ツヲノ女郎花ヲ云ヘルニヤ、又有ル說ニハ如蒸粟云ベキヲ、粟字ヲ誤テ粟トハカクリ、蒸粟トハムセルクリニハ非ズ、蒸粟ト云フ木名ナリト江帥云ヘリ、魏文帝鐘大理與書云、赤擬雞冠、黃侔蒸粟ト云ヘリ、是ハ玉ノ色ヲ云ヘル也、王逸正部論云、赤如雞冠、黃如蒸粟、白如猪肪、黑如純漆ト云ヘリ、

〔東雅十五草卉〕女郎花ヲミナヘシ〇中略　萬葉集に見えし所は、女郎花のみにあらず、美妾娘子部四、佳人部爲、美人部師等の字をも用ひたり、壒囊抄に靈鬼志を引て、菊を女郎花といふ事は、本據ありといひけり、されど古今集の序にをみなへしの一時くねるといふ事を、ふるく釋せしに、むかし小野頼風といふものゝ、八幡に住みて、京なる女と互ひにゆきかよひしに、其女頼風を恨むる事ありて、川に身を投て死しけり、死せし時にぬぎ置きし山吹かさねの衣の、土に朽ちて此花咲き出でたりけりといふ事あり、此事また靈鬼志に見えし何文が女の塚に、菊花を生せしといふに似たりし事なれば、女郎花の字借用ひて、ヲミナヘシといはむ、誠にしかるべし、粧樓記に木蘭を女郎花といひしは、只其艶なる事を記せしものと見えたり、又江談に花色如蒸粟と云ひし事を、文選を引て、蒸粟に作るべしと云ひしも、又誠に然なり、されど此花の如きは、蒸粟にはよく似てけれ、漢にして如何に云ひしものにやあるらん、似たるものどもあれど、それとおぼしき者はいまだ見ず、

〔藏玉和歌集秋〕思　女郎花